

## 裁判員は何を被ったのか？

——プラトン『ソクラテスの弁明』冒頭のメッセージ——

納富信留

プラトンの対話篇では冒頭の一語、あるいは一行が全体のモチーフを象徴的に示すことがあり、有効な文学・哲学技法として認められている。『ゴルギアス』『パイドン』『ポリテイア』『法律』では冒頭の一語に、『クラテュロス』『メノン』では冒頭の一行にそのような意味が込められている\*1。それはプラトンが「書き物」としてのソクラテス対話篇に込めた仕掛けであり、法廷演説の形態をとる『ソクラテスの弁明』（以下『弁明』と略）には、これまで認められてこなかった。冒頭部が作品全体をまとめる意味を帯びることは、全体を読み終えた後で最初に立ち戻って解釈する読者にのみ明らかとなるからである。一回きり与えられ記録さえ残らない口頭の弁論では、基本的に用いられにくい技法である\*2。とりわけ、多くの註釈者はプラトン『弁明』を、前399年の裁判でプラトン自身が見聞きしたソクラテスの言葉のある程度忠実に報告する作品と見なしており、その場合、完全な創作であるソクラテス対話篇との違いは一層大きくなる。

『弁明』については、以上の理由から、冒頭部はとりたてて検討に付されてこなかった\*3。本稿はその先入観を否定し、冒頭の一行が作品全体へのメッセージを含むこと、ただしそれは普通に読む限りでは理解できないこと、従って、著者プラトンはこの作品をくり返し読み解く言論として書いたことを示す。その場合『弁明』は、ソクラテスが法廷でなした弁論の報告として他の対話篇と異なる種類の著作ではなく、むしろ同じソクラテス対話篇に属することになる。

\*1 これらの例は、M. F. Burnyeat, 'First words: a valedictory lecture', *Proceedings of the Cambridge Philological Society* 43 (1997), 1-20 が論じている。Diskin Clay, 'Plato's first words', *Yale Classical Studies* 29 (1992), 113-129 も参照。『パイドン』冒頭の *αὐτός* を Clay は authority とし、Burnyeat はイデア論との関係、さらにアリストファネス『雲』やピュタゴラス派との連想で捉える。N. Notomi, 'Socrates in the *Phaedo*', *The Platonic Art of Philosophy*, George Boys-Stones, Dimitri El Murr and Christopher Gill (eds.), Cambridge University Press, 2013, 54, 66-67 も参照。この技法を強く意識して註釈したのはプロクロスであった（『ティマイオス』『パルメニデス』註解）。

\*2 とはいえ、『イリアス』冒頭の一語 *μῆνιν* が同様の役割を担うことは、口承文学でもこの技法が用いられる証拠となる。

\*3 むしろ「序論」にあたる部分が当時の法廷弁論の技法にどの程度沿っているのかが、Schanz, Riddell, Burnet, Smith & Brickhouse, Stokes ら註釈者、研究者の大きな問題関心となってきた。

まず、その冒頭部と拙訳を見ておこう\*4。

17 A1-2-4

Ὅτι μὲν ὑμεῖς, ὦ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, πεπόνθατε ὑπὸ τῶν ἐμῶν κατηγορίων, οὐκ οἶδα· ἐγὼ δ' οὖν καὶ αὐτὸς ὑπ' αὐτῶν ὀλίγου ἔμαντοῦ ἐπελαθόμεν, οὕτω πιθανῶς ἔλεγον. καίτοι ἀληθές γε ὡς ἔπος εἰπεῖν οὐδὲν εἰρήκασιν.

アテナイの皆さん、皆さんが私の告発者たちによってどんな目にあわれたか、私は知りません。ですが、私のほうは、あの人たちのおかげであやうく自分自身を忘れるところでした。それほど説得力をもって、彼らは語ったのです。しかし真実は、あの人たちは、いわば何一つ語りませんでした。

μὲν ... δ' οὖν ... καίτοι と対比されるこの有名な書き出しで、冒頭の一行に注目したい。そこではまず、「私は知りません οὐκ οἶδα」というソクラテスの表白が目を引きすが、その含意はここではまだ明瞭ではない（本論末尾で立ち返る）。他方、従属節の動詞 *πεπόνθατε* の意味について、これまで註釈者たちはまったく議論してこなかった。ここに全篇を読み解く鍵がある。

「目にあう」と訳したその語は、従来の日本語訳では「印象、心持ち」といった訳があてられ、心の状態、主観の問題と解されてきた\*5。こういった訳語は欧米の翻訳をそのまま受けるもので、*impression, effect, Eindruck* という名詞、あるいは *affect, feel* といった動詞でそのような意味が与えられている\*6。

動詞 *πάσχειν* は *ποιεῖν* の受動を意味し、なにかを被る状態を表す。それは物理的な被害であることも、心理的な受動、つまり印象であることもあるが、従来は後者の意味で解されてきた。だが、この語は『弁明』で計 10 回用いられ、それぞれの箇所できわめて重要な役割を担っている。その議論の流れを追うと、冒頭の語の意味が次第に明らかになる。

[1] 現在完了が用いられる冒頭 17 A1 の後、ソクラテスはアポロン神託に促されて始めた「知と不知」をめぐる探求の従事でこの語を用いる。[2] 21 C5 ではアオリストで「そ

\*4 以下の翻訳は基本的に、光文社古典新訳文庫の拙訳（2012年）による。

\*5 「感を有せし」（木村鷹太郎、1903）、「印象を与えたか」（久保勉・阿部次郎、1921）、「印象を受けられた」（田中美知太郎、1963）、「心持ちになっている」（山本光雄、1973）、「心持ちになられた」（三嶋輝夫、1998）となっている。

\*6 Jowett 訳では “How you have been affected”, “How you have felt” となっており、John Burnet, *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Oxford University Press, 1924, 148 は “what effect (impression) has been produced on you” と註記している。古くは、ステファノスが “animi vestri ... affecti fuerint” とやや敷衍した訳をつけ、フィチーノは “affecerint” と一語で訳していた。日本語訳はこれら伝統的な理解を受けたものであるが、英語の *impression, impressed* が「印象」という日本語より強烈な意味を持つことには注意した方がよい。

の吟味で次のような経験をしました *ἔπαθον*」と語り、[3] 22 A2 「誓って、私はこんなことを経験した *ἔπαθον* のです」とくり返す。これは探求においてソクラテス自身が受けた経験を指すが、[4] 22 C4 では、「詩人たちもまた、なにかこのような状態にある *πάθος πεπονθότες* ことが私には明らかになりました」として、判明した相手のあり方を指す。それは、「知らないのに、知っていると思っている」という無知 *ἀμαθία* にあたるが、他人によって被ったものではなく自分の思い込み *δόξα* がもたらす状態であった。

若者墮落という罪状の検討においては、ソクラテスの周りに集った若者たちが本当に害悪を被ったのかが問われる。[5] 33 D7 では過去完了で、「自分の親族が私によってなんらかの害悪を被った *ἐπεπόνθησαν* わけですから」と問いを提起し、そのような被害を申し出る本人や親族が皆無であったことを指摘する。何を被ったのか、被らなかったのかが、裁判の焦点であった。

罪は刑罰で償われる。アニュトスら告発者たちは、ソクラテスを死刑にすることで大きな損害を加えたと思うだろうが、それは [6] 35 A6 「死刑にでもなったらさぞひどい目に遭う *πέισσθαι* と考えているのでしょうか」という人々の思い込みに基づく。だがソクラテスは、死刑が彼自身にとって大きな害悪、つまり被害となることを否定する。死が本当に悪いものか善いものかは、だれも知らないからである。

有罪確定後にはアオリスト形で、どんな「刑罰を受ける」のか、という争点が語られる。ソクラテスは [7] 36 B5 「人生を平穩に過ごさなかったという理由で、どんな処分を受けたり *παθεῖν*、支払いをしたりすれば、私に相応しいのでしょうか」と問い、[8] 36 D1 では、「私はこういった人間なのですが、一体何を受ける *παθεῖν* のに値するのでしょうか」とたたみかける。ソクラテスはなかなか刑罰を申し出ないが、[9] 37 B5 「メレトスが私に求刑したことを受けない *πάθω* ようにと、恐れてでしょうか」と自ら疑問を發し、不合理にも見える頑さが死刑を恐れてではないことを明言する。この裁判で受けるであろう刑罰が、自分にとっては害悪を被ることではないという確信を、ソクラテスはこう語っていた。

「では、いいですか。もしあなた方がこの私を死刑にしたら——その私とは、私が今お話しているそんな人物なのですから——私よりも、皆さんご自身を害することになるのです。と言いますのは、私に危害を加えることは、メレトスにもアニュトスにもできないからです——それは不可能なのです。善き人が悪しき人によって害を加えられるというのは、思うに、神の掟に適わないのですから。」(30 C7-D2)

さらに、死刑判決後に「裁判員たち」に向けた言葉は、こう明言する。

「しかしながら、裁判員の皆さん、あなた方は死に対して善き希望をもち、またこの一つのことを真実だと考えるべきです。すなわち、善き人には生きていても死んでしまっても、悪しきことは何一つないし、その人のことは、神々によって配慮されないことはないのだと。」 (4I C8-D2)

哲学の生き方を貫き、正義から外れることがなかったと自認するソクラテスには、重大な被害を受けるという意味での「刑罰」は存在しない\*7。自分の受けた「経験 *πάθη*」(4I B4) を彼岸の英雄たちのそれと比べたいと言う時、それは「被害」ではない。

最後に [10] 42 A1 で、息子の将来について一つの依頼を語る\*8。もし彼らが魂の配慮を怠っているのにそれを為しているように思い込んでいたら、ソクラテスが行ったのと同様の吟味と論駁を加えて欲しい。「もしあなた方がこのこと〔そういった仕返し〕をして下されば、私自身も息子たちも、あなた方から正しい報いを受けた *πεπονθώς* ことになるでしょう」。無知の状態に留まりながら知ったつもりでいる場合、論駁と矯正は、その人にとっては善き被害なのである。

善きあり方をする人にはどんな被害も生じない。他方、悪しく不正な行為やあり方をする者は自分の魂を害しており、その責任は加害者ではなく彼自身にある。だが、悪しき状態にあった人は論駁や刑罰によって正しく善き方向へと変えられる。それが「被る *πάσχειν*」の語に込められた哲学である。

以上の箇所と合わせて冒頭の *πεπόνθατε* を読むと、弁論によって受ける印象といった主観的で軽い意味ではないことが分る。「被る、目にあう」という観点から、各人のあり方が問題となるからである。冒頭のメッセージは、次のように解される。

「アテナイの皆さん。皆さんが私の告発者からどのような被害を被られたのか、あるいは被られなかったのか、私には分かりません。善き人、正しい人に対しては、彼らも決して危害を加えることはできません。もしあなた方が彼らの告発弁論によって害されることがあるとしたら、それは、あなた方ご自身が感情なり思い込みなりで善きあり方から逸脱し、正しく判決しなかった場合のことです。他方で、正しく判断し判決を下す者は、彼らの言葉によってもなんの害悪も被りません。

この裁判は私の生死をめぐるものというより——それは大きな問題ではあ

\*7 正しい人の魂は自身の害悪によって以外は壊されないという論点は、『ゴルギアス』で展開され、『ポリテイア』が最終的な論証を与える。

\*8 ここでの「息子たち」が何を意味するのかについては、光文社古典新訳文庫での解説 167-8 頁を参照。

りません。私は哲学者の生を貫きますので——むしろ裁判員、つまり正義の裁き手一人ひとりの生をめぐる裁判なのです。私の弁明を聞いて判決を下される皆さん、これから裁かれ試されるのは、あなた方ご自身です。」

これは、ソクラテスによる裁判員、つまり同胞アテナイ人に向けた生への挑戦であり、正しさの判断を徳とする「裁判員 *δικαστής*」(I8A) という市民の義務において「正しさ」という人間のあり方を問う言葉である。さらにこれは、著者プラトンから私たち読者へ向けた挑発である。裁判員、そして読者は、他人事としてソクラテス裁判を傍観したり、無責任に決断を投げ出したりすることは許されない。自身の魂が正しいあり方を保つか、自身を壊して劣悪になるかの瀬戸際である。

冒頭の一文に戻ろう。もう一つの対比である *μὲν ὑμεῖς ... ἐγὼ δ' οὖν* は、通常は省略される人称代名詞を明示的に用いることで「私／あなた方」の対比を強調し<sup>\*9</sup>、作品の末尾の呼びかけに呼応する(リング・コンポジション)。そこで「私は知りません *οὐκ οἶδα*」に込められた意味も明らかとなる。

42 AI-2-5

*ἀλλὰ γὰρ ἤδη ὥρα ἀπιέναι, ἐμοὶ μὲν ἀποθανομένῳ, ὑμῖν δὲ βιωσομένοις· ὅπότεροι δὲ ἡμῶν ἔρχονται ἐπὶ ἄμεινον πρᾶγμα, ἄδηλον παντὶ πλὴν ἢ τῷ θεῷ.*

ですが、もう去る時です。私は死ぬべく、あなた方は生きるべく。私たちのどちらより善き運命<sup>きだめ</sup>に赴くのかは、だれにも明らかではありません。神は別にして。

これが『弁明』という作品の冒頭に込められたメッセージである<sup>\*10</sup>。

(東京大学)

\*9 R. Kühner, B. Gerth, *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*, II-1, §454, H. W. Smyth, *Greek Grammar*, §1190 参照。

\*10 本稿の作成にあたっては、『フィロロギカ』査読者の方々から貴重なコメントをいただき、指摘された論点を反映させていただいた。お礼申し上げます。